

国立長寿医療センターなどの研究チームは、アルツハイマー病の発症前に、原因たんぱく質の状態が分る血液中の目印を見つけたと発表した。

発症の兆候を少量の血液で見つける可能性につながる成果で、11月11日付けの、日本学士院の学術誌に掲載される。

アルツハイマー病は、原因たんぱく質「アミロイドβ」が脳内にたまり、脳が委縮して起きるとされ、アミロイドβが蓄積し始めてから発症までに15～20年を要すると考えられている。

脳内のアミロイドβの蓄積を調べるには従来、脊髄に針を刺して脊髄液を採取するなど、患者の負担が大きかったり、大がかりな画像分析機が必要だったりするのが課題であった。

今回の研究では血液中の微量のアミロイドβ関連物質の増減を調べることで、脳内のアミロイドβの蓄積状態を確認できることが判明した。

アルツハイマー病やそうでない人を含む65～85歳の62人を対象に解析した結果、脳内の画像分析の結果と92%以上の精度で一致した。

同センターの柳沢所長は、「0.5ccの血液があれば、発症前の兆候を見つけられる可能性がある。発症予防や治療薬の開発につなげたい」と話している。

(2014/11/11 読売新聞から)